

計画された国土、構成された未来

貴司山治『青人草』と〈東亞協同体〉の論理

村田裕和

はじめに

一九八〇年代、後に「バブル景気」と呼ばれる好況がその絶

頂へと突き進むなかで、土地開発・リゾートホテル事業を展開して一時代を築いたのが西武鉄道グループである。⁽¹⁾ 同グループ

は関東甲信越地方の山間部で、一九五〇年代から本格的なゴル

フ場・スキー場開発を始めていたが、映画『私をスキーに連れ

つて』(一九八七年公開)のヒットも手伝つてバブル時代の象

徴ともいえるスキーブームが到来したことはよく知られている。

同映画に登場する施設(ホテル・スキー場)の多くは西部

鉄道グループであり、一九八九年に日本オリンピック委員会(Ｊ

ＯＣ)会長となつて長野オリンピック(一九九八年開催)の招致

活動を展開したのもグループ会長堤義明であつた。

グループ創業者の堤康次郎は、大正時代に軽井沢や箱根の土

生み出すとともに、地価そのものを上昇させて銀行からのさら

に多額の融資を引き出すという鍊金術のような経営手法は、文
化やスポーツといった領域をも飲み込み、効率的に編成し、利

潤を生み出していったといえるだろう。

それらのスキー場では、ふもとから山頂へと伸びる無数のリ
フトの支柱に「国土計画」と書かれた銘板が見られた。西武鉄
道グループの持ち株会社であり土地開発・不動産事業の「国土
計画株式会社」は、スキー場のリフトやゴンドラなどグループ
内の索道事業を一手に引き受けっていた。スキー場とは、見方を
変えれば、付加価値によって同一の交通機関(索道)を繰り返
し利用する必要(需要)が生み出された空間であつて、それは
鉄道沿線の不動産開発と鉄道事業を組み合わせる私鉄経営の方
程式をミニチュア化したシステムでもあつた。

グループ創業者の堤康次郎は、大正時代に軽井沢や箱根の土
生み出すとともに、地価そのものを上昇させて銀行からのさら
に多額の融資を引き出すという鍊金術のような経営手法は、文
化やスポーツといった領域をも飲み込み、効率的に編成し、利

潤を生み出していったといえるだろう。

堤の経営する「箱根土地株式会社」は、一九四四年に「国土計

変更され、一九六五年に

は「興業」の文字を外し、

一九九二年には「株式会社

「コクド」となる。二〇〇四

〇五年の堤義明会長の

証券取引法違反事件を経

て、二〇〇六年に元傘下の

株式会社プリンスホテル

（一九五六年創業）に吸収さ

れて消滅したことは記憶に

新しい^④。

近年の貴司山治研究では、安岡健一が一九四五年から戦後にかけての貴司の丹波胡麻郷村での開拓について農政史の側から詳細に論じている。しかし、「よもや数年後に自ら入植しなければならないとは思つていなかつた^⑤」時期に、なぜ「開拓」を、しかも「内地開拓」を題材としたのかはまだ十分に明らかにされていない。その後の実際の入植は、食糧事情の悪化と空襲の危険が直接のきっかけだつたことに間違はないと思われるが、他方、友田義行は、「大東亜建設の理念」と、入植後の「新しい社会」建設への希望とのあいだに、ある種の連続性があると指摘している^⑥。貴司山治にとつて「開拓」というテーマはいかに見出され、いかなる意味をもつていたのか。「転向」と「東亜協同体」、この二つの契機を軸に考察する。

「国土」開発の里程碑の

一 擬装された転向

よう掲げられた「国土計画」の四文字は、バブル時代の一見きらびやかなイメージとはあまりにかけ離れた泥臭さと禍々しさを放つてゐる。しかし、この四文字は、一私企業の歴史だけを背負つていたのではなかつた。社名としての「国土計画」が誕生した時代は、まさに「国策」としての「国土計画」が東アジアを徘徊した時代と重なつてゐる。

本稿では、貴司山治が初めて「開拓」をテーマとした新聞連載小説『青人草』（一九四二年）をとりあげ、「国土」を計画し開拓していくデベロッパーとしての国家・資本と、転向作家の身体との間に切り結ばれた葛藤の痕跡を明らかにしたい。

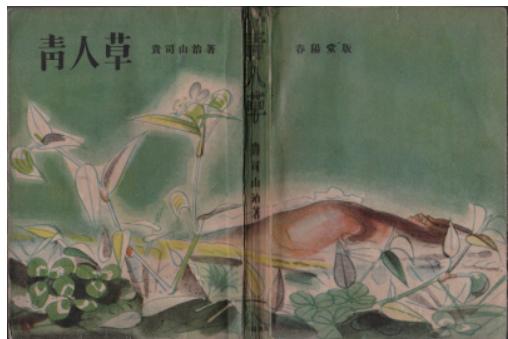


図1:『青人草』表紙 (1942年) 装訂・柳瀬正夢

『青人草』は、一九四二（昭和一七）年三月二三日から八月四日まで『報知新聞』に連載され、その後、同年一〇月一八日に、春陽堂書店から単行本版が刊行された^⑦。

内容は、長野県出身の貴族院議員で財閥会長でもある津村綱武の美しい娘津村美智子をめぐつて、津村家の三名の書生（田井一民・里見尚・大江龍夫）が思いを交錯させる一方、津村の隠し子不似子や、不似子が思いを寄せる技師長・須原有吉たちの運命が絡み合いつつ展開し、日中戦争が拡大を続ける一九三七

年後半期を舞台に、やがて私心を捨てて国家的価値の追求に投身していこうとする物語である。

作品は、三名の書生の一人田井一民が、美智子への失恋から浅間山で自殺をはかつて救助されるところから始まる。これが一九三四（昭和九）年の出来事で、そのあとすぐに津村綱武が病で急死する。田井は津村家には戻らず、再会した友人の立石信吉の思想に共鳴して「国土開発運動」（一八一頁）に携わることになる。

その後、一九三七（昭和一二）年の日中戦争開戦直後からの年の暮れにかけてが、物語の主要な時間となる。作中では、ときどき語り手が、現在（一九四二年）との時間的な隔たりを強調する次のような言葉を挟んでいる。

支那事変がはじまつて、国は戦時状態にはいつてゐた。しかし国民は、とりわけその上層階級はまだ平和を夢みてゐた。（中略）東京の市内には庶民階級のためにはアメリ

カ製のフォードの四タクがうるさいほど走つてをり、上層階級のためにはイギリス製の高級自動車が、会社と待合の間を往来する役目をつかさどつてゐた。米英的なさま／＼なものが国内に充満して、その敵性がまだほとんど国民に知られずにある——かういふ時代にフィリップ・大統領ケソンが日本に来遊して、国の上層から大した歓迎をうけてゐたとしてもあへて不思議ではない。（七三頁）

語り手は、庶民までもが資本主義的消費生活を謳歌していた一九三七年を読者に思い出させる。一九四一年一二月八日以後、英米と戦うことを当然の使命と感じ始めている者たちも、数年前には、「敵性」に気づくとともに早く平和に浮かれていたといふのである。そして、この当時たびたび来日していたケソン（日本の侵攻以後アメリカに亡命）についても、親日派としてもでなしていた過去をあえて蒸し返すのである。

また、中国国民党軍との戦争はその背後の英米との決戦なくして解決できないという認識が作中人物の立石や須原（この二人が本書の思想的中心人物）によつて語られるなど、『青人草』の作品世界には、読者にとっての同時代（作中人物たちには未来の時間）の価値観があらかじめ色濃く投影されている。すでに巷にはその表徴があふれていたにもかかわらず、多くの人々はまだ事の眞の意味を理解できずにいるといった世界が仮構されているのである。

読者たちは、この小説によつて、「東亜新秩序」の建設に携わるための具体的な身ぶりを分かりやすく学ぶとともに、歴史的任務に参加することの崇高さを味わうことになるだろう。『青人草』はよくできた大衆啓蒙小説であった。そして、そのストーリーからロマンスを捨象したところに現れるのが、「国土開発運動」である。これは、次のように説明されている。

僕〔須原有吉〕は自分の仕事をやりながらいつも思つてゐるのです。食糧自給こそ最後の戦いだ……と。いくら武器をつくても国家の総力を維持する食料が確保されなければその国は必ず破れます。君〔立石信吉〕のやうな人が（中略）すでにこゝに着目して、満州移民、満州移民と、満州

へ内地農村の過剰人口を送りだしさへすれば万事解決するやうな常識が横溢してゐることのころ、食糧自給策と農村問題を結びつけて、国内の荒蕪地を畑に開墾することを提唱してゐるのを見出したことは、喜びにたへないのです。（一九一頁）

農村対策としての「開拓」には、同時に、労働問題、民族問題、人口問題が複雑に絡み合つていた。一九三一（昭和六）年の満州事変から翌年の満州国樹立への過程、さらにその後の満州移民（満蒙開拓移民）は、とりわけ一九三〇年の昭和恐慌（金融恐慌）によつて深刻化した農村窮乏の打開策として喧伝された立石は、同じ論理を内地開拓へと振り向けるのである。須原の発言を受けて、立石信吉は次のように答える。

農村の次男三男が自分の耕地を得るために働くことで、日本の新東亜建設の最終準備ができるのなら、この提唱に僕は命をすててもいゝと決意したのです。僕はこのことを日本の左翼運動が猖獗をきはめてゐる時代にいひ始めまし

た。階級の平等から社会や国家の発展は絶対にこない。國家と、その中に育つ社会の発展は、民族の理想と運命を実現していくことによつてもたらされると、僕は信州で友人たちにいひつけたのです。（一九二頁）

立石はこの運動を、「左翼運動が猖獗をきはめてゐる時代」から提唱していたという。一方、須原は、自分は「十年前」に左翼的な「階級理論の信奉者」であつて、「前科者」であつたと告白する。須原は、出獄後、津村綱武の勧めにより、一年以上をかけて中国・フィリピン・シンガポールの視察をおこない、それが「思想転換の旅行」となつて、今では「科学の仕事」（兵器開発）によつて「民族国家日本の建設」に打ち込もうとしているのである。

ここでは、転向者の内面的な葛藤の痕跡が消去されているばかりではない。フイリピン・シンガポール視察による「転向」の完成という脈絡は、太平洋戦争開始以後の読者でなければ意味を成さないであろう。それでもテクストは、「転向」が主体的な情勢判断にもとづくものであり、いささかも強制されたものではないかのようにあるまゝのである。

左翼運動が「猖獗」を極めていたのが、一九三〇年前後だとすれば、立石の「国土開発運動」はまさに満州国の出発時点にまでさかのぼることができる。その頃から、「左翼運動」などに迷うことなく、内地開拓運動をつづけてきた立石の先見性が

強調されているのである。しかしこの両者の会話は、「左翼運動」を否定すると同時に、一九三〇年頃（あるいはそれ以前）において国内開拓という選択肢が可能だったとするものであり、満州移民政策の建前を根本から相対化してしまっている。しかも、貴司山治たちが属していた日本プロレタリア作家同盟が、満蒙支配への徹底した反対によって過酷な弾圧を被っていた事實をも想起するならば、「左翼運動」への否定の言辞とはうらはらに、立石の「国土開発運動」と「左翼運動」との相似性さえ見えてくる。

われわれはここで二つの解釈可能性を持つ。文字通りに受けとれば、内地開拓を行うことは大東亜共栄圏建設のためである。しかもそれは、国策として内地開拓が本格化（後述）するよりもはるかに早くから開始されている。貴司山治自身が「左翼運動」に關係していた時間すべてを、作中の立石は「国土開発運動」にささげ、しかもそのことを貴司が警察署の留置場で丸一年を過ごしていたのと同じ一九三七年において語っているのである。小説家が小説を通して、過去の時間を否定し、上書きしていく小説。これ以上の転向証明書があろうか。

一方、満州国を国内の人口問題や食糧問題上必要だとする論理と『青人草』のテクストを、ともに「想像の共同体」をめぐつて交わされた言説の地平において見渡すならば、テクストが、『満州帝国』というフィクションをその成立起源において無効化し、その開拓物語を攪乱してしまっている点は興味深い。小

説をもし一個の「芸術作品」としてみれば、筋の矛盾混乱でしかないが、それは同時に満州帝国という「作品」そのものが、当初から矛盾混乱を抱えていることの正確な反映ではなかろうか。この場合、作者の意図にかかわらず、この小説は行為遂行的に転向を擬装しているといわねばならない。しかしそれは、あまりに小さな裂け目でしかなかつた。

二 國土は計画される

国策としての「国土計画」について確認しておこう。

一九四〇（昭和一五）年九月二四日、第二次近衛内閣の閣議において、企画院立案の「国土計画設定要綱」⁽⁹⁾が可決された。国策としての「国土計画」がここに始まるのである。その要綱には、「新東亜建設」のため、「日滿支」を中心として国土開発を統制的に推進することが目指され、具体的には、鉱工業・農業を中心とする生産力の拡充、そのための工場や農地の効率的配分、電源確保、治山治水、交通通信施設の整備、人口配分（移民）などを研究し遂行すると記されていた。これは道州制の検討なども含めた非常に大規模な機構調整・再編論であつた。

貴司山治の『青人草』が『報知新聞』に連載中だった一九四二年七月一日には、企画院の肝いりで設立された国土計画研究所が発行する雑誌『国土計画』が創刊されている。⁽¹⁰⁾

その「発刊之辞」（無署名）には、「国土計画とは、国土を合

理的に開発利用し以て土地の有する自然的・社会的価値を有効に發揮せしめるための総合的国家計画」であり、「今日に於ては大東亜国土計画としてのみ考へ得べきものである」と規定されている⁽¹⁾。

雑誌の編集後記によれば、同研究所は一九四一年八月に設立されたとあり、同年一〇月から始まつた研究会の演題と講師を見れば、その概要はおよそ明らかとなる。

第一回「国土計画策定の為の研究事項に就て（上）」（企画院調査官・田邊忠男）、第二回「国土計画策定の為の研究事項に就て（下）」（企画院第一部第三課長・村山道雄）、第三回「農業と国土計画」（農林省耕地課長・溝口三郎）、第四回「国土計画と電力計画」（日本発送電株式会社企画課長・平井寛一郎）、関西支部研究会「国土計画の基本問題」（京都帝国大学教授・高田保馬）、第五回「人口政策と国土計画」（企画院調査官・美濃口時次郎）、第六回「生活圏について」（内務省都市計画東京地方委員会技師・石川栄耀）。

には軍備と防空、間接には自給と人口増強の四つの目標を示している（二〇年後の一九六〇年に人口一億人突破が目標とある）。とりわけ興味深いのは、国土計画における自給は、さまざまな地域単位におけるそれぞれの「自給」でなければならず、そのためにも諸施設・機構・人口の「分散」が重要であるという議論である。東京への一極集中を抑制することは防空上も、食糧自給の観点からも重要であり、地方都市およびその周辺農村への人口配分と工場等の施設の分散は生産力向上などの面からも強調されている。また、「日満支」のなかでも「日本経済の自給」が最重要であり、その食糧自給（穀物の増産）の方途の一つとして「高地の開発」も示されていた。

また同じ創刊号の溝口三郎「日本の農地開発計画」は、農

地造成・改良事業のうち、「農地造成事業においては、開田二十万町歩、開畠三十万町歩を、昭和十六年度乃至昭和二十年度の五箇年間に着手し、昭和二十五年度に完成せしむる計画」としている。右の面積の半分は、一九四一年三月に公布された農地開発法にもとづいて設立された農地開発営団が開発すべきものと説明されていた。溝口が、「近時、國際情勢の緊迫化に伴ひ、国土計画は、国防上の見地から、（中略）日本が空襲下に曝された場合を想像」して、「仮令国内の交通機関が寸断されても、地方地域毎に、出来るだけ、生活圏を維持」する計画を立てねばならないと明言しているあたりに、政府官僚たちの

講師はいづれも国土計画研究所の顧問や参与を兼務しており、経済学者高田保馬は研究所理事長である。また石川栄耀は、都市計画の専門家として著作も多く戦後にまで影響力を保つた。

高田保馬は右の講演を活字化したものと思われる論考「国土計画について」（『国土計画』創刊号、一九四二年七月）のなかで、経済法則を国家的目的の為に沿わせることが「国土計画」であるとのべ、その目的を「国防国家」の建設としたうえで、直接

冷ややかな現実認識が現れている⁽²⁾。

一九四二年前半において、大東亜共栄圏建設のために国内の農地を開拓し穀物の自給率を高めることは、まさに国策の中心的な施策となっていた⁽¹³⁾。『青人草』の内地開拓（「国土開発運動」）は、一九四〇年以降に議論が本格化していった国策としての「国土計画」を、そのイデオロギーの背景としているのである。ただし、それは一九三七年という時間の中で「実験」されている。前述したように『青人草』は、過去の一時点（一九三七年）に、未來としての今（一九四二年）を投影するという、一風変わった「未來小説」だった。

農地開発當団が設立される四年前に、国策を率先して実行に移すテクスト。一九三七年は、長野県大日向村がモデル開拓団として満州への分村移民を開始した年である。移民は、個人の意思によるものから、集団的・統制的・計画的なものへと変化していった。翌々年になつて和田伝の小説『大日向村』（朝日新聞社、一九三九年）が書かれ、豊田四郎監督による映画化『大日向村』（東宝、一九四〇年）もなされた。『青人草』には、満蒙開拓移民の先導者加藤完治へのオマージュともとれる会話（一六二頁）もあり、その点では、国策の率先者たちに併走するテクストである。

いずれにせよ、この年が、丸一年間に及ぶ警察留置場での「脱法的」勾留の年であり、またそれによって「完全転向」にいたつたとされている点は重要である⁽¹⁴⁾。大東亜共栄圏イデオロギーの完全なる内面化は、さまざまな予兆／徵表を鋭く見抜き、情

報を関連づけ、未来を正しく構想するテクストを書くことで達せられねばならない。それは端的に言えば、「転向」の記憶を上書きする作業であった。テクストのわずかな記述が、「満州帝国」の前提を相対化し得たとしても、テクストから見て「未來」に起くる〈国土計画〉は、内地にも外地にも食糧自給を求めて、採算をも無視した（というよりも、資本主義イデオロギーにもとづく「採算」や「利潤」という概念自体を拒否するかたちで）農地開拓の必要妥当性を主張した。〈国土計画〉が始動するに及んで、テクストが転向を擬装する余地は、完全に閉ざされたのである。

三 軽井沢の超克

『青人草』の主要な舞台は東京各所と、別荘地として知られる〈軽井沢〉および浅間山である。軽井沢といつても、上野・高崎方面から行くと軽井沢駅より一つ向こうの沓掛駅（現在の中軽井沢駅）周辺である⁽¹⁵⁾。冒頭、自殺に向かう田井一民を乗せた列車は、信越本線横川駅に停まっている。そこからアプト式鉄道が敷設されていた碓氷峠⁽¹⁶⁾を専用汽車による牽引で越えて軽井沢駅に到り、次の沓掛駅で下車するのである。

もともと江戸期より、浅間山南麓には中山道が走り、東から軽井沢宿・沓掛宿・追分宿と宿場が開かれていた（浅間三宿）。一八九三（明治二六）年に横川・軽井沢間が開通（信越本線全通）すると軽井沢地区は近代的避暑地として繁栄を始める一方、沓

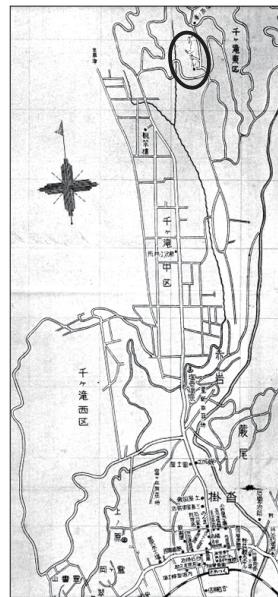


図2:地図・沓掛地区(1942年)
右下に沓掛駅、左上が浅間山麓

掛・追分地区は寂れていった。『青人草』の舞台・沓掛地区が、隣の軽井沢に飲み込まれるように避暑地・別荘地へと変貌するのは、大正期に入つてからのことである。

津村綱武の娘美智子の所有する別荘は、古くからの軽井沢地区ではなく、この沓掛地区にある。本文に、「津村美智子の山荘は、沓掛からのぼつて行つて、土地会社が開拓した千ヶ瀧住宅地の坂を登つた奥の方にあつた」(九七頁)と記されているのがそれである。図2では右上から左下にかけて、千ヶ瀧東区・中区・西区とあるうち、中区の奥の観翠楼がある辺りであろう。

このことは、津村工業が旧財閥ではなく、第一次世界大戦以後(とりわけ満州事変以後)の軍需産業とかかわつて急速に成長した新興財閥であることを強く類推させる。

沓掛は浅間山の南東山麓に南向きに開いた扇状地である。立

測所に勤めるが、それは沓掛駅からバスに乗り換え、「グリーンホテル」(図2上方楕円の中)をすぎて、「峠の茶屋」(峠の茶屋)で降りた所にあり、現在も東京大学地震研究所の管轄として実在している。

別荘地と広大な未開拓地が隣接する浅間山麓だからこそ、軍需産業にたずさわる財閥の娘と、大東亜共栄圏イデオロギーに目覚めた科学者・技術者・開拓者が交錯するという、この小説の階級的・地政学的な興味も生まれ、大衆小説的な「偶然」が随所に機能する条件にもなつていたのである。

右の引用に「土地会社が開拓した」とあるように、沓掛地区を最初に開拓したのは「沓掛遊園地株式会社」(一九一七年設立)であり、その社長こそ当時まだ無名の堤康次郎であった。沓掛(中軽井沢)では、現在でも「軽井沢 千ヶ瀧別荘地」と称して西武鉄道グループが開発・分譲をおこなつていているが、沓掛は、後の「国土計画(コクド)」発祥の地といつても過言ではない(一九四〇年前後は「箱根土地株式会社」時代)。

貴司山治が息子とともに初めて一夏を「千ヶ瀧住宅地」の山荘で過ごしたのは『青人草』執筆開始の半年前(一九四一年八月一日～九月一〇日)のことだつた⁽¹⁷⁾。ここで貴司は、『維新前夜』の原稿を書き、一月に亡くなつた妻を追憶しつゝ彼女の童話『つばめの大旅行』と『蟻の婚礼』の校正をおこなつてゐる。滞在中には、「グリーンホテル」で、松岡洋右前外相の一家と隣り合わせたり(八月二二日)、妻の遺した物語の続きを見るような

羽根蟻の大群に見舞われたり（三四日）といったエピソードもあった。「箱根土地」の社員からは、社長別荘の向かいの傾斜地を勧められたが、結局購入したのは別の区画だった。

堤康次郎は一九一八（大正七）年から本格的に開発に着手し、翌年には分譲販売を開始している。初期の別荘は、一〇〇坪の土地に七坪の建物付きで五〇〇円という値段で売り出された。別荘としてはきわめて低廉である。由井常彦編著『堤康次郎』（リプロポート、一九九六年）は、堤が都市における「中産階級の台頭とその生活欲求」を、「全身で理解し」、「中産階級のための土地開発をはじめとするサービスの提供」に「使命感」さえ感じていたと述べている（七九八〇頁）。

「箱根土地」が「グリーンホテル」を買収して、ホテル業を開始するのが一九二三年、一九三七年頃には四階建ての瀟洒な建物（図3）となる。都心と郊外住宅地との往復を生活圏としていたと述べている（七九八〇頁）。



図3：緑に映えるグリーンホテル（絵葉書）

て都市モダニズムを消費する新中間層にとって、「軽井沢」は、手の届くもう一つのモダン空間となっていく。〈軽井沢〉と文學者・知識人の親和性もこの頃から加速する。有島武郎が旧軽井沢の淨月荘で縊死を遂げたのも一九二三年のことであったが、軽井沢では、すでに一九一八（大正七）年からは後藤新平を総裁、新渡戸稻造を学長として軽井沢通俗夏期大学が開かれ、吉野作造、小山内薰、そして有島武郎も講義をおこなつた。¹⁹消費と教養が結合した大正文化主義的空間の形成である。

芥川龍之介ら多くの文学者たちを軽井沢に導いたのは、室生犀星だった。犀星に師事していた堀辰雄の「美しい村」「風立ちぬ」などの軽井沢小説が、今日に及ぶ〈軽井沢〉イメージにとって決定的な役割を果たしたことはいうまでもない。海野弘は『モダン都市東京』（中央公論社、一九八三年）において、佐藤春夫の「美しい町」（一九一九年）と堀の「美しい村」（一九三三年）を挙げて、二〇年代の町から三〇年代の村へという移行が、二つの小説の題によつて、象徴されている」とした上で、中野重治の「村の家」（一九三五年）を挙げながら、「堀の私的な、内在的な〈村〉への転移は、中野の國家権力による〈村〉への隠退と無縁ではないのだ」とも書いていた。二〇年代から三〇年代への推移を「町」（都市モダニズム）から「村」へと空間的に展開する論は相当大雑把なようではあるが、これを仮説的な座標軸としてみると『青人草』はどうなるだろうか。

室生犀星のもとに集い、『驢馬』同人として震災後の一時期

を過ごした堀と中野の「村」への方向性は、一見すると軽井沢（モダニズム文学）と故郷・地方農村（プロレタリア文学）とに分裂したままのようにも思われる。しかし、「転向」を主体化・内面化して「開拓」へと接続する『青人草』のテクストをここに置いてみれば、「内在的な〈村〉」と「國家権力による〈村〉」の双方の契機は、一九四二年のこの小説の中ではもはや分離不可能な形で結合されていることに気づく。〈軽井沢〉という近代を「超克」すること。それこそが、転向作家と彼の大衆啓蒙小説に課せられた主題であった。

四 東亜協同体の論理

一九二〇年代以降も、堤康次郎は「新中間層」をターゲットとした積極的な開拓・開発を続けたものの、それが裏目に出で「箱根土地」は一時破産状態になり、その後も「昭和恐慌のもとで不動産不況」が長期化する中、経営は安定しなかつた。それでもなお堤はバス路線やドライブウェイの整備も手がけ、一九三四（昭和九）年頃からようやく別荘の売れ行きが好調となり業績は回復した。²²⁾

業績回復の最大の要因としては、満州事変以後の軍事予算の急増と軍需産業に牽引された企業活動の活性化が考えられる。本稿第一章の引用文にあるように、語り手は街中に外国製タクシーや高級自動車があふれている風景を強調していた。そ

こでの「庶民階級」が都市中間層と重なるとすれば、彼らの一九三〇年代中頃が経済的好況のピークを迎えていたことをそのシーンは物語っている。

かつて日本プロレタリア作家同盟に所属していた貴司は、藏原惟人や中野重治・小林多喜二らからその大衆作家の傾向をたびたび指弾されてきた。それが今、「通俗小説」と貴司自身が呼ぶものによって生活の安定を得、小説の題材として〈軽井沢〉を視野に収めたことは、皮肉と言えば皮肉であった。しかし、そこでも貴司は、次のように書かずにはいられなかつた。

落葉松の密生した火山の麓に、無限の土地が、昔からまだ少しも開墾されずにのこつてゐる。このごろになつてそれが土地会社の利権になり、都会の人間が別荘を建て、避暑に来る場所になつて行くのだ。さうした消閑的な、不生産的な土地の使ひ方を、立石は久しい前から憤つてゐた。
(中略) / 「おれたちの故郷に国土開発の運動をおこさう」
(六二頁)

別荘生活者への批判は、貴司自身にも向かっているだろう。

しかしこれを、自己反省やプロレタリア文学的なブルジョア階級批判と同じものとすることはできない。いや、たとえ作家の身体にそのような階級観が浸透していたとしても、同時にここには、作家自身の自己批判さえもが、抜き差しならぬ形で「国

土開発運動」へと収斂していくような論理が働いている。そのような地点に、貴司は立たされているのである。

作中、津村美智子は、千ヶ瀧の別荘でメリメ原作の『カルメン』（一八四五）を読んでいる。

ビゼーによつて歌劇に作りかへられたカルメンは、メリメの原作の中では、歌劇とは又すつかりちがつた野生の姿をさらけだしてゐた。もし、教養といふものをぬきさつてしまつたら、自分でもやはりカルメンのやうな女になつてしまふだらう？もし亦さうであるのなら、火山観測所にこもつてゐる里見尚は、ホセのやうな男になるだらうか？

（九七頁）

「原作」と「歌劇」を対比して、それを荒々しい「野生の姿」と「教養」の対立として認識する。この関係性は、「大学教育に災ひされ」て、「階級理論の信奉者」となつてゐた須原有吉が、「思想転換の旅行」をへて、「民族の自然的、理念的使命」の自覚に回帰することと同じ構造をもつてゐる。基層を成す原始的な価値・理念としての「日本」と、改作され上塗りされた知識・教養としての西洋資本主義的な考え方との対比が、重層的なレトリックとして表れる。これは、「土地」に関しても当てはまる。

立石と田井は、官有林や私有地を勝手に測量し、警察所に留置される。警察の司法主任と田井との問答で、田井は、「マル

サスの土地と人口の関係は、今では机の上の科学です。実験されない理論です。食料増加のために、土地開発を、どんな手段ですればいゝかといふ積極的な人間の努力をぬきにした機械的な唯物論がまちがつてゐるんです」（二五〇頁）と説く。

一方、司法主任は、植林から得られる国益の方が、労力を要しない分経済的だ（大切な国家資源としての労働力を無駄に費やすのは国策に反する）と主張する。これに對して田井は、「それこそ利潤が即ち国益だとしか思へない唯物論……いや、アダム・スミス以来のユダヤ的経済思想だ、それを以てしては断じて國家開発は圖れない」（一五二頁）と答える。田井たちにとつて、蔣介石との戦争は、英米との直接対決につながり、国内での自給自足は必至となるから国内の開拓は「国家国防上、何より大切」（一五三頁）なのである。

前掲の溝口三郎「日本の農地開発計画」には、「農地の開発は、経済上の見地のみに倚る訳にはゆかぬ。仮令經濟上においては引き合はぬやうな土地でも、内地植民上必要な處で、而も技術上開発の余地のあるところはすべてこれを開發せねばならぬ。（中略）一寸の土地と雖も、これが利用を全からしめ、祖国の土地の上に国民生活の基礎を確立し（中略）、国土開発計画に特別の意義を持たせなければならぬのである」と説明させていた。

すでに林や別荘になつてゐる土地を田畠に作り替える作業は、改作された演出をはがし、「原作」に帰るというモチーフ

の変奏なのである。いや、それは時に「回帰」の様相を呈し、時に記憶の上書き＝鋤返しのごとく見えるにせよ、世界の事物の関係性をまったくあらたな理念のもとに「構想」し直すことこそ、テクストに厳命された「東亜協同体」の論理だった。

近衛内閣のブレーンの一人となつた三木清は、「戦時認識の基調」（『中央公論』一九四二年一月）において、「東亜新秩序の建設」に必要な「戦時認識」について次のように説明していた。

自由主義経済は生産のアナーキーということによって特徴付けられる。これに対して今日の統制経済の目指すところは、経済の計画化によってこのようなアナーキーを克服すること、秩序を再建することである。（中略）秩序の観念は、認識の観念であると共に道徳の観念であると言うことができる。（中略）「一見無秩序であるかのよう、見えるものの間において、秩序を発見する」ということが我々の認識の努力である。²³（傍点村田）

を離れては思惟されることも実現されることも不可能²⁴」なのである。

食糧の増産と自給率向上のための内地開拓は、国家的使命に沿うものである。しかし、〈國土計画〉が求めたものは、そうした活動を通しての、「大東亜共栄圏」への参加であり、さらにはその参加を通して、現実認識を改め、みずから「生」と「國土」を再構成していくことであつた。もちろんそれは、〈転向〉の徹底的な内面化として、その葛藤の記憶さえもローラーでならしていく作業を意味した。〈開拓〉とは、まぎれもなく〈転向〉と同義だったのである。

おわりに

『青人草』のプロットは、一見すると単純な大衆小説にすぎないが、実はレトリックとしての「東亜協同体」をくり返し行使していた。内地開拓という物語は、内面化され起源さえ消された「転向」の究極的なアレゴリー（寓話）なのである。言い換えれば、〈転向〉こそフィクションの起源ではなかつたか。振り返ると、すでに満州事変と同じ一九三一（昭和六）年には、軽井沢通俗夏期大学の講師の一人に「東條英機がいた」のである。作中、須原に言わしめた「民族国家日本の建設」を、貴司山治自身がもつとも内面化し自己の生きる指針としていたを意味していた。「東亜新秩序の建設」は「世界新秩序の構想

一九四二年に、彼が作品舞台として〈軽井沢〉を選び取る道は、

すでにその一九三一年から始まっていたのかもしれない。

そしてまた、浅間山麓の開拓運動を描く『青人草』が、貴司山治とは全く別の角度から「大衆」と「開拓」（開発）を自己の活動領域の中心に見据えていたもう一人の人物－堤康次郎を引き寄せたことも決して偶然ではなかった。

その堤が、一九四四年に社名を「国土計画興業」としたことは、時代背景からいっても当然のように見える。だが、この年の雑誌『国土計画』を見ると、すでに国策（大東亜建設）としての（國

土計画）は有名無実化し、空襲被害の軽減や、重要施設と住民の疎開、食料確保といった現実的課題が論議されていたことが一目瞭然である。「国土計画興業」は、その意味では「遅れてきた国土計画画家」だったといわねばならない。

堤や西武グループについて書かれた文献をいくつか参照して不思議に思われるのは、社名にまでなっているにもかかわらず

国策としての「国土計画」への言及が皆無だということである。政治家としての堤康次郎（一九二四年に代議士初当選、戦後衆院議長）は、大限重信につらなる民政党系の自由主義者であつて、国際連盟脱退反対の英米協調主義者であり、近衛文麿による新体制＝経済統制反対論者であつた。まさに彼は、『青人草』に投射された近衛新体制／東亜協同体論が超克すべき対象とした近代資本主義イデオロギーそのものだった（但し翼賛選挙には参加）。

その後の「王国」の礎を築いていったのである。

資本の論理に徹した堤は、東亜協同体の虚妄をおそらく一毛たりとも信じていなかつたにちがいない。そして、戦後に引き継がれた（国土計画）は、結局のところ資本の論理と一体となつて、一九八〇年代末のバブルの狂乱を準備していった。²⁶ それは、戦時下に端を発した官民あげての（国土計画）が、よじれあい絡み合つた末の姿であつた。

『青人草』を書き始めるおよそ一月前の一九四二年二月七日、貴司は「日記」に次のように記している。



図4：千ヶ瀧別荘地の高原風景（絵葉書）
堤康次郎が1918年から開発。貴司山治は1941年夏に初めて訪れ、翌年『青人草』を書いた。

新聞には自分の知つてゐる多くの文士が南洋方面へ従軍してその消息がはじめて断片的ながらのつてゐる。それに

よるとヒリツピンに行つてゐるのもあればビルマ、マレイへ行つてゐるものある。自分はどうなるのだらう。今にそ

ういふ地方にこの身をおくかも知れない。又そうした「恵み」なしに今のやうに永久に書斎に閉ぢこめられ、仕事に閉ぢこめられた生活がつゞくかもしれない。

こういった心境に立ち至つた作家が、軽井沢の高原を脳裏に思い浮かべつつ、「開拓」＝「転向」を我が身に引き受け、東亜協同体の理想に自己の作家的生命を託そうとしていたのである。しかし奇妙にも貴司は、その東亜協同体の虚妄が消え去つたあとでさえ、「開拓」を放棄せず、ますますその核心に近づき、国家と資本による〈国土計画〉が立ち去つたあとで開拓地（胡麻郷村）で、その行く末を見届けようとした。〈転向＝開拓〉は貴司の身体に深く刻み込まれ、もはやそれは衣服のように脱ぎ捨てられるものではなくなつていたのである。しかしそれゆえに、「雷新田」（戯曲）から「丹波アリラン」にいたる数々の戦後開拓小説・作品が書かれることになる。それは多くの転向文学者たちの中でも、貴司山治の他には、誰にも成し遂げられない仕事だった。

戦後、はからずも、浅間山麓には悲劇的な逃避行の末に帰国した大日向村分村が實際に入植し、しかし、その後の土地買収で共同体は壊滅的に傷つく。⁽²⁾ いったい〈土地〉は誰のものか。〈国土〉とは何か。『青人草』が本当に啓蒙的な意味を持つのは、

注

(1) 一九六四年に創業者堤康次郎が亡くなり、一九七〇年に西武グループは、鉄道グループ（堤義明会長）と流通グループ（堤清二会長）に分裂。のちに前者は「西武グループ」後者は「セゾングループ」と称されるが、本稿では分裂後の鉄道グループを「西武鉄道グループ」、分裂前を「西武グループ」と表記する。

(2) 一九五二年、湯ノ花ゴルフ場、五四年、仙石原ゴルフ場（現大箱根カントリークラブ）、五六六年、軽井沢スケートセンター、翌五七年、万座温泉スキー場、六一年に苗場国際スキー場を開業。
(3) 猪瀬直樹『ミカドの肖像』（小学館、一九八六年／小学館文庫、二〇〇五年）。「帳簿上は赤字スレスレで税金を極少に押さえながら手持ちの土地に付加価値を与える施策を打つ、結果として生じた利益は借入金を増やすことでその利息と相殺される、そして赤字スレスレが維持され、さらに資産が増えていく。実際の帳簿上の資産と含み資産の差は開くいっぽう……」（二七四頁）。

(4) 堤康次郎および「西武グループ」については由井常彦編著『堤康次郎』（リブロポート、一九九六年）、大西健夫・齋藤憲・川口浩編『堤康次郎と西武グループ』（知泉書館、二〇〇六年）を参照した。
(5) 安岡健一「戦時・戦後の開拓政策と貴司山治」（『貴司山治研究』（不二出版、二〇一一年）所収）。同「敗戦後の疎開文化人による社会運動」（『新しい歴史学のために』二七三号、二〇〇九年五月）も参照。

(6) 友田義行「占領期・開拓農民時代」（前掲『貴司山治研究』所収）。

(7) 本稿での言及は春陽堂書店版に拠つてある。なお／は改行を「」は引用者注を示す。

(8) 石堂清倫は『わが異端の昭和史』（上巻、平凡社ライブラリー、

所は「西区一六八」の貸別荘。以下日記からの引用はすべてDV版による。

前掲『堤康次郎と西武グループ』にも「堤の土地事業は、（中略）いわゆる「新中間層」を顧客とするものであった」（一八頁、川口浩執筆）とある。猪瀬直樹『ミカドの肖像』（小学館、一九八六年）も、堤が「軽井沢を拡大し大衆化」したとしている。引用は小学館文庫版（二〇〇五年）一八五頁。ただしここでは戦後の展開もふまえられている。なお高級別荘と貸別荘は一九二九年から販売、経営開始された。

小松史生子『軽井沢と避暑』『コレクション・モダン都市文化 第五二巻 軽井沢と避暑』（ゆまに書房、二〇〇九年）八〇四頁。

引用は中公文庫版（二〇〇七年）三一九～三二〇頁。

前掲『堤康次郎』一七六～一〇七頁。

『三木清批評選集 東亞協同体の哲学』（書肆心水、二〇〇七年）三四一～三四二頁。

同前、三四四頁。

同前、三五〇頁。

小林英一『学校教育と文化活動の発達』『軽井沢町誌 歴史編（近・現代編）』（軽井沢町誌刊行委員会、一九八八年）二九三頁。

前掲 本間義人『国土計画を考える』一三〇頁。

和田登『旧満州開拓団の戦後』（岩波ブックレット、一九九三年）。

図2は「大日本職業別明細図 第七一四号 長野県軽井沢町小諸町」（東京交通社、一九四二年五月）の一部。中島松樹『軽井沢避暑地一〇〇年』（国書刊行会、一九八七年）附録復刻版に拠った。

図3・4は絵葉書集「詩の千ヶ瀧風景」（一九三七年頃発売か）